

## 第1回吹田市シティプロモーションアドバイザー会議 議事要旨

1 日時：平成29年9月29日（金）10：00～12：00

2 会場：吹田市役所 中層棟4階 第3委員会室

### 3 出席委員

田中委員長（大阪学院大学商学部教授）

森副委員長（吹田青年会議所）

内海委員（近畿経済産業局通商部国際化企画調整官（頑張る自治体応援隊 大阪北部担当））

大林委員（ジュピターテレコム 関西メディアセンターアシスタントマネージャー）

菅原委員（サンケイリビング新聞社編集部デスク）

春貴委員（NPO法人市民ネットすいた理事）

大塚委員（市民委員）

村上委員（市民委員）

### 4 出席職員

中嶋部長・原山理事・熱田次長・田中参事・佐納主幹・白澤主査・堀主任・立岡係員

（傍聴者なし）

### 5 案件

（1）吹田市シティプロモーションビジョンについて

（2）シティプロモーションに関連する事業について

### 6 主な意見等

（委員長）

ビジョンが策定されて初めの1年目となる。委員の皆様には各事業の取組について理解していただき、第3者に見ていただくことで、ここをこうしたらもっと良くなるのではという点が見えてくるのではないかと。市内には少しずつ市民にゆっくりと浸透していく変化や、一方で健都の取組のような急激な変化も起こってきている。吹田の魅力が大きく変わろうとしている段階にあるのではないかと感じている。良い機会にあることから一緒にいろいろと考えていきたい。

（副委員長）

健都やエキスポシティ、古くからの文化など吹田には様々な魅力がある。それ以外にも発掘しきれていない潜在的なもの、あるいはこれから創っていくもの、内外の人々が実感できるような「吹田ってこれだよ」というものを示せるような会議になればと考えている。

（委員長）

各部署の取組が書かれた資料をいただいているが、なかなか全般的に進めていくことは難しいのでまずお気付きの点からご意見をいただいきたい。

(委員)

資料を拝見して、いろんなことを幅広くやっておられるということを改めて知った。定住志向を高めていくことを目指している中で、住民の高齢化による医療費の問題は重要となる。他市で歩いた歩数によって商品券がもらえるような取組を実施しているところもある。商品券の発行費用より医療費の抑制費用の方が大きかったとのこと。行政が一から仕組みを作るのは大変なので、民間で独自に実施していることに連携するのは大切だと思う。

(委員長)

商店街の中に介護施設を誘致して、高齢者に買い物をしてもらうという仕組みを作っている自治体もある。健康に関して歩くということとインセンティブの組み合わせを作っている。吹田は様々な優良な事業者が多いと考えられるので民間との連携はやはり重要ではないか。

(委員)

普段NPOの支援に関わっているが、NPOイメージは高いが、普段NPOの支援に関わっている中で、実態は高齢化が進んでいたり実はなかなか厳しい状態にある。自治基本条例の認知度も低く、自分たちが住むまちにどう主体的に関わっていくかという意識については強化していく必要があると感じている。資料 3 についてはあくまで行政の取組をまとめたものになっているが、行政以外の主体がどう関わっているかがもう少し見えた方が良いのではないか。市民がサービスを受けるだけでなくどれだけ供給できているのかという点が整理されることで足りないところや、もっと伸ばせるところが見えてくるのではないか。市民がどれだけ市に対して貢献できているかを分析してみるのが大切だと思う。

(委員長)

行政が大学やNPOとどうつながっていくかという派生図があればわかりやすいのでは。全体になると広いので何かの分野でパイロット的なものを切り口にしていくのもいいかもしれない。

(委員)

ビジョンの9つの要素から何か一つずつでもピックアップして考えてみるのも良いかもしれない。

(委員長)

市民にビジョンだけ渡しても正直わかりにくい。何か代表的なもので示していくことが大切では。

(委員)

特に関心を持ったのはオリジナル婚姻届の取組で、それ以外にもインスタ映えするようなパネルがあれば、一生思い出に残る機会となる。婚姻届以外にも出生届もあれば面白いと思う。

(委員長)

インスタ映えするものが本当に良いものかはわからないが、美しいものは人を惹きつける力を持っている。婚姻届以外にも封筒一つにしてもただ印字されているだけでなく、くわいのイラストがあるだけで柔らかい印象を持つことができる。市民にとってアットホームな思いをもつことができることを各部署が考えていけば良いのでは。

(委員)

やはり市民の参加はとても大切だと思う。婚姻届のように知らず知らずのうちに市民から情報発信されていくことが理想的でありベストだと思う。資料を拝見していると非常に上品でスマート、言葉を選ばずに言うときれいにまとまっていて見どころがないことが吹田のイメージ。他市をみ

るとするがしこくプロモーションを実施している。市民と一緒にいいながら行政発信にとどまっている部分がまだまだ多いのではないか。例えば大学が多いことがフューチャーされているが、実はそこが本質ではないと思う。高槻にはうどんギョーザというものがあるが、高槻のイベントには必ず出店している。吹田くわいを使った吹田カレーとか吹田バーガーとか家庭でも真似ができるようなものを提案して、市民を巻き込んでいくのも良いのでは。ビジョンの要素の「食」があっても良いのではと感じた。行政発信によって、その後は市民が勝手にプロモーションをしてくれるようなことがプロモーションの本質であると考えている。吹田の文化を広める手法として吹田検定があっても良いのでは。小学生が4級、中学生が3級、高校生が2級、大学生が1級くらいのレベルで。メディアとしても取り上げやすい。市民が楽しみながら吹田のことを学べるきっかけとなるのでは。真面目に良いことをしていても、実はそれは市民はあまり興味がないということをメディアの立場からの意見として伝えていきたい。恥ずかしい部分もあえてとりあげていくことで、興味がない人を振り向かせることができるかもしれない。

(委員長)

吹田に対する評価は以前に比べて間違いなく高くなっている。行政にも市民にもそれが定着しつつあるのではないか。吹田学というものが関西大学で実施されているが、京都学や大阪学と比較して少し範囲が狭いかもしれない。

(委員)

吹田には上品なイメージがあるが1つ2つはディープな部分があってもいいのではないかと思う。「太陽の塔のまち吹田」のような一言で吹田を表せるような言葉があればいいのでは。今回は市民に対してのプロモーションの観点から食や吹田学の話を見せてもらった。

(委員長)

芦屋にも阪神地域やJR地域など様々な特性があるが、その上に大きなイメージがかぶさっている。では吹田の大きなイメージは何かを考えてみるとやはりそれは知的なイメージなのかもしれないがその点はまだまだ模索していく必要がある。

(副委員長)

事業者は地元に着用をもっていることが多い。以前南吹田でフラワーロードという名前がありながら花がないことから花を植えたことがある。住んでいるまちをよりよくしたいという思いを持っている人は少なからず存在している。それぞれが地元のために取り組んでいる事例は探せばたくさんあるはず。行政として新しいものを創っていくのも大切だが、今あるものを拾い上げていくことも大切だと感じている。

(委員長)

上品なことというのは毒がないので実は訴えていきにくい。しかし吹田市民は上品な意識が強いのでは。この点については今後も考えていきたい。

(委員)

吹田は人口が増加傾向で、他市から見ればうらやましい限りだと思う。南大阪でも様々なプロモーションを実施していて、特に人材育成に力を入れている。これからの吹田市には地域の担い手をどうやって発掘したり育てていくかが大切だと思う。堺市では地域の魅力を自分たちで発信できる人たちが行政が育てている。市民がそれぞれにこれが街の魅力だというものを持っていて自

発的に発信できている。そうした人材育成の部分をシティプロモーションが担っていくのが良いのでは。吹田にも様々な地域性があるかと思うが、エリアに応じた魅力を発信できる人材が増えれば良い循環が生まれるのでは。大切なのは吹田のファンを増やすことで、他市から見て憧れを持たれることはすごく大切だと思う。あと千里南公園のパークカフェの運営にも大きな関心を持っている。事前の社会実験でも意外に高齢の方も利用も多かったと聞いている。いろいろな世代が利用しやすいカフェになればと思う。単にお茶をするだけでも良いが、ここがコミュニティの一つに育てばいいと思う。

(委員長)

地域の中で試みや企画をぶつけていくような考え方をもって吹田市が果敢に取り組んでいく風土も大切だと思う。

(委員)

吹田に興味のない人に関心を持ってもらうことが大切だと思う。以前からすいたんのファンで、先日旅行をした広島福山市にくわいのキャラクターがいることを知った。小さな企画であるがくわいつながりでゆかりの地を訪ねてみることで吹田に興味を持てるかもしれない。

(委員長)

すいたんファンクラブを設立してみてもどうか。感情的愛着と合理的愛着があるが、吹田が目指すのは感情的愛着を増やしていくことのはず。すいたんのファンももっと増えるのでは。

(委員)

愛着よりもシビックプライドを醸成することが大切だと思う。まちを好きだけではまちは良くなるのでは。例えばパークカフェを利用する層はある程度経済的に余裕がある層で、生活が厳しい世帯も多いはず。経済的ゆとりがある人へのサービスを増やすことより、本当に必要としているサービスが実現されることの方が大切では。婚姻届のデザインを良くすることもいいかもしれないが、例えば渋谷区や世田谷区のようなパートナーシップ制度を導入することの方が市民にとって有益なのではないか。SNSが非常に効果的なものとなっているので、例えば「suitable」とハッシュタグをつけて市民が「吹田で実現したいこと」を発信していく。実現したいことというのはニーズであるので、ネガティブなものも含めてそこからシティプロモーションに必要なものが見えてくるのではないかな。

例えば保育園に入りたいというようなこともでてくるかもしれないが、それらを解決していくことがまちとしての魅力を上げていくことにつながるのではと思う。

(委員長)

シティプロモーションだけを捉えるのか、まちづくり全体を考えるのかは難しい。ただシビックプライドについても最終的にはまちが好きか嫌いかというところに行きつくと思う。素晴らしいものの中に影の部分もあるかと思うが、吹田のシティプロモーションは強いものを探すという発想に基づいている。実現したいことを募集するのは市民参加というシティプロモーションの本質だと思う。声の大きい人の意見だけではなく、小さな声を拾うことも本当の吹田の魅力を拾えることにつながる。

(委員)

行政の役割はセーフティネットだと考える。市民の力の見せ場は隙間の部分だと思う。自治会活

動に関わらず例えば公園の掃除をしている人も多い。自分たちが住んでいるところは快適に守りたいという思いを持っている。ある地域でこういう活動をしているというのをメディアを活用して紹介することも効果的なのでは。せっかく大学があるので大学生をまちへ引っ張り出すことも大切。Project based learning の一環としてお題を出して地域の課題を解決していけば特段大きな費用も発生しない。市役所はセーフティネットの部分も担っているが、民度の高さを活用した仕組み作っていくことも必要。

(委員長)

以前吹田で市民がチームを組んで問題を提起、解決する取組があった。福井県大飯町でも交通費と宿泊費を出して夏のレジャーと合わせて課題解決を実施する取組があった。無料でというのはやはり難しいので、若干の費用を捻出することで広く鵜の目鷹の目で意見を得るきっかけとなる。地域の特にリタイアの方々は関心が高いのでぜひやってみてはと思う。今日は行政の取組を資料にいただいたが、それだけではなかなか見えにくい部分も多い。行政が何か始めるとき、行政が全部やるのではなく既存のシステムと連携していくことがシティプロモーションを推進していく上で重要。市民の方が地域で地域のことを考えるシステムについてもう一度考えてみてほしいかもしれない。色々な意味で話題になることが必要か。吹田独自の食があっていいかもしれない。先程の提案の実現したいことを募集していくにはどのような手法が考えられるか？

(委員)

SNSで「suitable」のハッシュタグを付けて発信していくことが考えられる。ただそれだけでなく何かプレゼントのようなインセンティブがあればより良い。吹田くわいではなくすいたんのグッズとか。拾いきれていない声を拾うにはSNSは非常に効果的だと考えている。また、婚姻届のデザインも良いが、パートナーシップ制度の導入など本質的な部分を進めることも忘れないでほしい。

(委員長)

日本でフランスのボックス制度のようなものを導入するには時間がかかるだろうが、そういうシステムを考える段階にあるかもしれない。

(副委員長)

シティプロモーションとリーダーの育成の関わりについて考えてみたい。吹田は流出口が一定数あり、吹田から出ていく人であっても吹田の人材として活躍していくことが大切であると感じている。鯖江市で千里山出身の新山直弘さんという方がまちづくりの関係で活躍しており、吹田で講習会を開いてもらったりしている。「自分は吹田出身なんだ」という意識を醸成することが回りまわって吹田へいい影響を与えていくのではと考えている。吹田の中だけではなく世の中に対して良い影響を与えていく人材を育てていく施策があればよりシティプロモーションの目的にも資するのではないかと思う。

(委員長)

吹田出身で活躍している人を一覧にしていくのもシティプロモーションの仕事の一つではないかと考えられる。